二度目の小田原生活

入居者　鈴木　壽津子

私が小田原に住むのは、これで二度目になります。どうしてここ小田原に移り住む事になったのか簡単にご説明できればと思います。

昭和十四年に私は生まれ育った東京を離れ、疎開で小田原へまいりました。その時私は女学校三年でしたので、小田原高女に転校するつもりでした。しかし小田原高女は四年制で私が通っておりました学校は五年制です。お役人の子女が優先で三年生に空きがなかったので、そのまま横浜まで三年間列車で通学しました。(その当時、電車ではなく機関車)

同期の方が、大磯、平塚からも通っておりましたので、列車の中は楽しかったです。生活も落ち着き、昭和十七年三月に卒業する事が出来ました。その頃、勤労動員が始まり男性の多くは製造工場へ働きに行っていた為、私に声が掛かり生命保険の事務所(小田原)に勤める事となりました。

終戦の八月十五日朝、一個の焼夷弾で小田原の街の一部が焼けました。この時勤めていた会社も焼けてしまいました。その後に二回移転しましたが、そのまま勤め、横浜支社の転勤が決まりました。小田原から暫く通勤しましたが、小田原に住む必要もなくなり、昭和三十年十月に蒲田に家を建て引っ越しました。小田原で過ごした十六年間は、湯本の山にネズミ茸採りに行ったり、長興山枝垂桜や西海子の桜、お堀端の桜、城内の桜見物等、思い出せば沢山あり楽しく過ごさせて頂きました。

そして昭和五十八年一月に定年退職致しました。その当時母は七十八歳で何とか一人で生活をしておりましたが、段々と認知症が進行し、度々道に迷う様になりました。そんな折、家の近くに特別養護老人ホームが出来ると知り、申し込みに行ったところ、幸いにも入居が決まりました。一安心もつかの間、口から食事も出来なくなり、胃瘻となりました。何度も入退院を繰り返し静脈の栄養剤注射になり、個室での生活となりました。痰がつまった姿がとても可哀想に感じたので、毎日の様に病院に通いました。私を見ても娘であ

【発行所】
財団法人 長寿会
小田原市入生田475
TEL.0465-24-0002(代)
発行人／加藤 伸一
編　集／夢編集委員会

もくじ

花に寄せて……2
充実生活支援サービス
円満幸福の生活を願って……3
父の教育……4
長寿園の日々……4・5
お月見の想い出……5
スイーツで笑顔……6

長寿園理念

「人生の目的は円満幸福の生活にある」との信念に基づき高齢者がそれぞれ円満で幸福な生活ができるよう所要の協力と支援を行うことによって社会に貢献します。

る事さえも分からなかったでしょう。その後しばらくして転院を求められ、一駅近くに転院先が決まりました。転院が決まった二・三日後、朝電話で病院に呼び出され、とんで行きましたところ、母の身体や手は暖かく荒い呼吸でした。三月のお彼岸の中日の翌日でした。

葬儀や埋葬も済ませ、自分自身の老後を考えた時に、小田原には両親のお墓があり、以前住んでいた事もあったので、そんな小田原にもう一度住みたいと思い、こちらに参りました。

当時あった映画館も無くなり町並みはすっかり変わってしまいましたが、空気は綺麗で緑が美しいところは変わっていませんでした。私はこんな小田原が大好きです。

花に寄せて
秋の花（コスモス）

入居者　渡辺　千萬子

この花に「秋桜」という字をあてたのは、あるいはそう読ませたのはいったい誰だったのであろうかといつも思う。

「桜」のもつ華やかさや、強さもないように見えるこの花には、少し似つかわしくないように思えたのだが、ほんとのところこの花はなかなかしたたかな強さを持っている。細かい茎の先端に咲いている赤、白、桃色の濃淡の花々は、風に吹かれてゆらめきながら折れる事なく、倒れもしないで、しゃんと立って咲いている。私はこの花はあまり好きではないけれど、秋と言うとやはりコスモスを思い浮かべるのはこの花のもつ強い魅力のせいなのかも知れない。

コスモスはまるで日本在来の花のように風景に溶け込んでいるけれども、明治になってからの外来種でまだ百年にもなっていないらしい。中国の南部の産とかメキシコから来たとか、ものの本に書かれていた。

うす紅の秋桜（コスモス）が
秋の日の何気ない陽だまりに
ゆれている
こんな小春日和の
おだやかな日は
もう少しあなたの
子供でいさせて下さい

誰の歌だったか思い出せないけれど、この歌が好きだったのを思い出した。もう、この年齢になって歌謡曲を聴くこともあまりなくなり、こんな感傷に浸ることも無くなってしまったのは寂しい。

短歌

入居者　中澤　志づ江

挿し芽してその成長を慈しみ
見事な菊が我を見守る

ラウンジに月下美人が今宵咲く
その見事さへ集う幸せ

充実生活支援サービス

円満幸福の生活を願って

理事長 加藤伸一

長寿園では結果の平等を追い続けています。結果とは、ご入居者個々が等しく円満幸福の人生を送っていると日々思えることです。人間はみな価値観がことなっています。したがって、できるだけ個々の価値観に合わせた個別のサービスを提供しなければ、結果の平等は生まれません。

その個別サービスとは目に見えるものもありますが、一番大きく大切なものは、その人の精神や魂に訴えかけるものです。

価値観自体が形のあるものではなく、思想や信条ですから、そこへ訴えるサービスも物質的なものではなく精神的なものまたは魂に訴えかけるようなものということになります。

しかし、これは目に見えないために、金銭に換算しようがありません。また、人間というものをかなり理解していないと提供が難しくなります。

そのために、一般の介護サービスでは掃除や洗濯等の家事援助サービス、入浴介助、食事介助、排泄介助といった目に見えるサービスの回数、頻度でサービスの度合いを推し量るのです。手厚い介護とされる場合は、通常ヘルパーの数の多さであらわされます。ご入居者の幸不幸の状態ではあらわされません。そして、その量が平等に提供されたかどうかが重要となるのです。しかし、人間自体が、健康や価値観や家族環境やそのおかれている状態が、それぞれ全部違うのですからサービスが平等でも結果は平等にならない。にもかかわらず、サービスの提供の量の平等で処理されるのは、その方が簡単で、結果に不平等があって苦情がでても却下しやすいからではないでしょうか。

心の豊かさや満足感や幸福感は、物質的なものだけでは絶対にもたらされません。長寿園が理念としている「円満幸福」の生活は、人間同士の触れ合いがあることによってはじめてもたらされるものなのです。

この理念を実現するために、これまで行ってきた、その人がその人らしく人生を送っていただくための心のサービスを新たに「充実生活支援サービス」と命名いたしました。有料老人ホームをはじめ多種多様な高齢者住宅や介護施設が混在する現在、あと二年で六十周年を迎える長寿園をより特徴のある高齢者の住まいとしていきたいと思っております。

円満幸福を願った球心探求の碑

川柳

入居者 小池怜子

逃げ切った蚊の身軽さに
腹が立ち

ゴキブリにすれば悲鳴が
腑に落ちず

均等に切ったメロンへ
目が走り

父の教育

入居者 家族
阿部信枝

「その花はなんだ？」
「オシロイバナ」
「そっちの赤いのは？」
「サルビア。もう、去年も教えたのに！」
「そうだったなぁ、ははは」
毎年繰り返した父と幼い頃の私の会話である。

父はかつて中学の理科の教師をしていた。でも、電気工学、が専門で植物になると全くだめだった。

「イモの花も見たことがない者が、イモの花を教えている。」とよく言っていた。そんな父は縁側で団扇片手に寝そべり、庭遊びをする幼い娘に毎年同じ質問をしていた。

父は大正七年に北海道で生まれ、苦労して東京の大学に入学した。やっと学生になったと思ったとたんの学徒動員。戦争では多くを語れないほどの過酷な経験をし、終戦を迎えた。その後、戦後の日本復興への希望と、母との結婚で家庭を持った喜びとともに父は教師の道を選ぶ。多くの生徒に囲まれ嬉しそうに笑っている父の写真が無数にある。きっと充実していた年月だったのだろう。

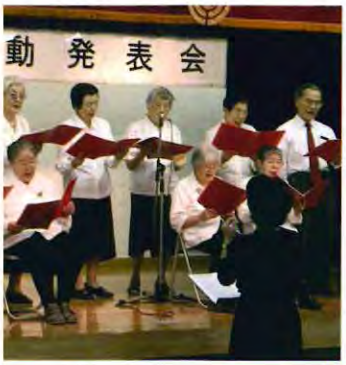
しかし、専門外の植物や動物を教えるときは、夜遅くまで下調べをしていた。几帳面な父は大学ノートに丁寧に図を描き、板書する言葉を並べる。ポイントには赤い線が引かれていた。自分では「デモシカ先生だ」と言っていたが、生徒に向き合う時は熱心で誠実だった。

「父さんの苦手な分野ほど生徒はよくわかると言う。自分のわからないことは、生徒もわからないだろう、と思うのがいいのかもしれん。」専門の電気や力学は、得意すぎて生徒の「分からない」ところが「わからない」状態だったのだろう。

今年の夏もいろいろなところで「オシロイバナ」と「サルビア」を目にした。

今になって思えば、父はきっと知らないふりをして、生意気盛りの幼い娘の妙な優越感が小さな自信となり、のちに理系の道へ進ませたことは、今もってなかなかの教育者だったと思う。父は現在九十三歳。長寿園の職員の皆様に見守られ、穏やかに暮らしている。

生徒に囲まれる教師時代のお父様



動発表会

歌を楽しむ夕べ

ご家族との会食

ミュージカル公演

お月見の想い出

入居者 竹中糸子

今年も仲秋の名月に出会えると、心待ちしていましたのに、あいにく台風が近づき暗夜でがっかりしました。

園では、毎年色々と趣きのある月見の集いがもたれ楽しい夕べと共に、どっぷりとつかりながら小学生の頃の先生に教わった古歌、

「月づきに月見る月は多けれど月見る月はこの月の月」詠み人しれず

「さて、今、月は何回出てきましたか」と先生のお言葉が思い出されます。

母の里の和歌山に疎開していた私は、友と三々五々連れだって「お月様いくつ、十三、七つまだ年、若い」とはやしながら、近所をまわりながら縁側のお供え団子を竹でさして皆と頂きました。その晩だけは無礼講で、澤山の団子がなくなった家ほど、澤山のよい事があるとか、面白くなつかしい遊びでした。今も続いているのか知る由もありませんが、おおらかなよき時代でした。古い古い想い出にひたりながら来年は、美しい満月に出会えますようにと願っている昨今です。

H24 お月見会

長寿園の日々

7月1日	七夕飾り付け
8月4日	夏祭り
25日	コーチャル歌声の部屋
9月2日	60周年プレイベント
9月12日～17日	敬老週間作品展
9月13日	クラブ活動発表会
14日	キネマデイ
15日	歌を楽しむ夕べ
17日	祝賀式典
22日	彼岸墓参り
30日	お月見会
10月30日	秋のバイキング

七夕飾り付け

夏祭り

クラブ活

スイーツで笑顔

生活部門統括　中島　あけみ

最近はパソコンや携帯電話でのメール等が一般的になり、人と人との会話が希薄になっています。そんな中で、ご入居者と職員の会話やご入居者同士のコミュニケーションはたいへん重要になってきます。

その様な思いから昨年十二月より「ほっとサロン」と言う取組みを毎月一回行っています。

全国から取り寄せたスイーツを食べながら職員も加わり、ご入居者の皆様と普段お話することの出来ない色々なお話をし、楽しい時間を過ごしております。

まだ入居されて間もない方や、あまりお部屋から出られない方などにお声かけをし、お越しいただくことで親睦を深めていきます。毎回二十五名～三十名の皆様がお越しになり、今では定着しましたが、最初は一時間どうしたら楽しんで頂けるか悩みました。参加して下さる方が思い思いにお話しを楽しまれるには、どんなお手伝いが出来るのか、又、どんなスイーツが喜ばれるのか等、話合いながら考えております。

人気のあるスイーツの場合は参加人数も多く、「一度食べてみたかったのよ」と喜ばれます。今は本当に便利な世の中になり、インターネットで全国のスイーツを瞬時に取り寄せることができ、ご入居者からのご要望にも応えさせて頂いております。

取り寄せたスイーツを食べながら笑顔で、たわいのない話が始まります。そこに私たち職員も加わり話が盛り上り、それぞれのテーブルから笑い声が響くのを楽しみに、次は何を取り寄せて喜んで頂こうか、仕事とは違う喜びを感じます。

「最近○○さん顔見ないけど、どうしたのかしら」と気にされる声も聞かれ、ご入居者同士の思いやりを感じられます。

毎日笑顔で暮らせることは、なかなかありませんが、笑顔の連鎖で少しでも楽しい時間を共有できることが出来れば良いと思います。

ご入居者の笑い声が私の仕事への励みになっております。温かい気持ちにしてくれる「ほっとサロン」がこれからもずっと続き、ご入居者の笑顔が見られるように楽しい時間を作っていきたいと思います。

ほっとサロン

たねや、くり小径

編集後記

今年度、新たに「夢」発刊の編集委員会が発足致しました。11月の発刊で２回目となります。

これからも、いろいろ考えながら、ご入居者やご家族の皆様が読んで「長寿園に入って良かった」と想っていただけるような、こころ温まる内容をお届けできるように努めてまいります。

次回の発刊は平成25年２月となります。

夢編集委員会